

座長：吉原 重美（獨協医科大学 小児科学
同病院アレルギーセンター）

産婦人科医はRSV母子免疫ワクチンを普及させたい

炭谷 崇義

富山県立中央病院 産婦人科

共催：ファイザー株式会社

2024年5月末、RSV母子免疫ワクチン（アブリスボ筋注用）が発売された。「妊婦への能動免疫による新生児および乳児におけるRSVを原因とする下気道疾患の予防」を目的とし、通年で妊娠24-36週を接種対象とされた。

無知な私には、2008年NEJM October 9「Effectiveness of Maternal Influenza Immunization in Mothers and Infants」（母体へのインフルエンザワクチン接種が、6か月未満児のインフルエンザ確定診断、および母児の有熱性呼吸器疾患を有意に予防した）以来のできごとであり、母子免疫ワクチンに対する新生児のRSウイルス感染症予防に、期待と伸びしろしか感じない。アブリスボが選択肢となるには、周知が最重要であり、妊娠管理を行う産科機関での情報提供は当然。小児科機関でも経産婦を対象として、妊娠中に上の子が受診したとき、特にRSV感染症で受診したときなど、傷に塩を塗り込むタイミングで恐縮だが、妊娠中アブリスボ接種の情報提供をいただけるとありがたい。

富山県は、ワクチン接種励行な風潮があり、今回アブリスボ導入も極めて速やかだった。接種率も全国上位と聞いている。また産婦人科医会が主導し、小児科医とのmeetingを経て県内接種推奨時期：32-36週を提言したり、RSV感染症に関する小児科医の講演を聞く機会を設け、アブリスボ接種を推進している。

接種場所に関して、通院中の産科機関がほとんどになるが、経産婦では小児科での接種も選択肢になり得る。ただし、接種後に産科領域の合併症が生じた際の医学的な説明など懸念も残る。

当院の運用としては、まずアブリスボは高価で院内在庫は置いてもらえず、接種希望者は入院も含め全例予約制で行っている。妊婦健診では、2か月毎に助産師保健相談を組み込んでいるが、8か月（28-30週頃）保健相談にアブリスボの情報提供を追加した。30-34週頃受診の際、希望者は次回受診時の接種を予約し、32-36週で接種している。紹介など転院の場合、間に合えば36週までに接種を済ませている。実感接種率は3割程度で、初産経産の差は感じない。

今後の課題としては、当院はじめ富山県内での周知は図られており、接種率の向上に努めたい。新生児における生後6か月までの良い環境を提供したい。